

目次

第一 はしがき

第二 天理教の教義と搾取

- (一) 教祖伝
- (二) 神観
- (三) 病理観
- (四) 布教上の用語
- (五) 所謂教義
- (六) 基本教義書

第三 天理教の組織と搾取

- (一) 教会組織
- (二) 教師資格
- (三) 信者に対する搾取
- (四) 教師に対する搾取
- (五) 教会に対する搾取

第四 祭典の執行と搾取

- (一) 儀式の執行
- (二) 両年祭の概観
- (三) 両年祭の意義
- (四) 両年祭の活動

天理教の搾取

第一、 はしがき

「屋敷を掃ろうて田売りたまへ天手古舞の命」とか又「屋敷を掃うて立退きたまえテンツルテンの命」とか俗間によく言われるのは、天理教の「みかぐらうた」冒頭にある「悪しきを掃うて助け給へ天理王命」の章句をもちったもので、同教信者が骨の髄まで搾り取られて零落し行く悲惨な状を嘲笑風刺したものであるが、皮肉にも又よく実相をとらえた言葉である。

祖先伝来の田地田畑から、家財道具、家屋敷にいたるまで悉くこれを売り払って、天理王命=天理教御

本部に運びつくした無一物の信者は、最早天理教を離れては生活出来ない。止む無く教会入りをして「御道の人」となり、教会の雑用などをして一生を終える。その中での少し気の利いたものは何とかして教師の資格を得て「にほいかけ」いくらかの信者を得ては小やかな宣教所を造り、自分が引っかかってきた、同じような手段で人々に働きかけては搾取し、その搾取によって宣教所から支教会、次いで分教会へと言うように教会所を漸次昇格して搾取の範囲を拡大し、本部に忠勤を擢んで中教会にまでもデッチ上げ本部の役員とでもなれば先ずは成功といふところ。

天理教発展の過程は巧妙にして悪辣なる伝統的搾取の連鎖に外ならない。天理教の教義と行事は、搾取せんがために出来ていると言っても敢て過言ではなく、事実教義の解釈と運営、一切の教説、用語は皆この目的のために働いている。更にその教会組織は上下の関係を宗教的結帯を以って緊密に結び付けて強固なる統制を保ち、同時にその間に自由競争を盛んならしめて信者からの搾取と布教戦線へ死に物狂いに突進せしめる、言ふまでもなく、如何なる宗教も程度の差こそあれ、何れも多少の搾取をしないものはない、然しながら、ものには自ら限度があり、社会的通念とも称すべきものがあって、その搾取の程度が目にあまり、そのやり口が巧妙にして悪辣、義憤を感じしめる様なものがあれば、世人の指弾を受けるのは当然であり、監督官庁としてもその実情を決めおくことは必要であり、時にはこれに向かって対処しなければならぬ。この意味に於いて、天理教が如何なる搾取をなしつつあるかを一応検討調査して見たのである。

ここに搾取とは言っても、その事実、内容、限界等を認定し判定することは至難の事に属する。由来、宗教信者の寄付、寄進の行為は當人の発意、意志に関する事であり、そこに無言の強制威嚇、或は詐欺が行われておかなければ、殊更に取り立てて問題とするには及ばないであろう。故に信者の個々の場合に於ける関係を揣摩臆測使用とするのではなく、教団の機構運営等その客観的方向から検討して搾取の事情を見ようとするのである。しかしここにも又困難が伴う。機構それ自身は判然しても、これが搾取に向かって動いて行く事情は、物的証拠や計数的結果を全体として具体的に挙示し難い丈に、搾取や詐欺なる事を決定するには余程慎重にかからねばならぬ。故にこの点を補うものとして専ら、物的証拠の薄弱なる、又それなき事件に於ける被告の人格、人物論の如く、その宗教全体の調子、教団の性格、布教の実際が単なる参考以上に有力なる判定資料たり得る、と言う事が考えられる。かくして、今天理教の搾取を便宜上、教義、組織、行事の三つの方面から分けて考察してみよう。即ち、

- 一、 教義、教説は如何に搾取に都合よきか
- 二、 教団組織及びその運営は搾取に対して如何に働くか
- 三、 儀式及び行事の執行に如何に搾取するか

第二、 天理教の教義と搾取

凡そ宗教の教義はそれ自身の意義と価値とを持っている。天理教教義の中にも亦よきもののあることは充分これを認める。然しながら、それは教義自体を教団から切り離し、機能を考えず、即ち、実際上使用される場合を考えないで、ただ抽象的に言ったときの事である。天理教の教義の具体的使用例、即ち信者に向かって説かれるのは、どんな場合にどんな教義が最も多いか、また信者が如何にこれを理解し、如何にそれを受け取ることが望んでいるかを具体的な結果や客観的影響と言う点から考えると、換言すれば、教義の宣布が教団に対して如何なる役割を果たしているかを客観的に見たときは、更にその教義の浸潤の結果は国家の進展や国民生活の向上に如何なる関係が有るかと言う事を考えた時には、天理教教義なるものは、仮令それ自身としてはよきものを持っていても、その個人的社会的弊害、客観的影響、決してこれを軽視することを許さないのである。天理教教義は文字の上での解釈や意味よりも実際上の機能と言う点からは、搾取のために巧妙に織り成された一つの組織であるとも考え得られる。事実はそのためにのみ働いている仕組みである。冗長な叙述や、説明はなる丈これを省いて以下簡単にこれを摘記して見る。

(一) 教祖伝－教祖雛形の道

これは天理教祖みき女が、総てのものを惜しみなく人に与え、無一物となり、貧のドン底に落ち切って「助け一条」のために働いたことを指し、天理教信者たるものは、「助け人衆」「神の用木」として「家屋敷家財道具を売り払ってこれを天理教本部にあげることにより」無一物となって谷底へ落ち、教祖の通ってきたと同じ途をたどらなければならぬと強調し、その実行を迫るのである。信者は無一物となっても少しも悔ゆることないばかりか、却って教祖が吾吾に通るべき雛形として示された途であるとして喜び、宗教的感激をさへ覚えるのである。教祖の○蹤を慕うはいずれの宗教にも見られるところ。然しこの教祖雛形の道に於いて天理教の搾取は已に準備されているのである。

(二) 神観

天理王命とは言うまでもなく、国床立命以下十柱の神総名総称であるが、その各々の神の属性は、率直な日常生活に於ける出来事や人間身体の各部の守護に配当され、それらを神からの借物である。簡単に表すと次の通りである。

1、国床立尊 世の中の水気、湿い一切の守護

人体中で水気のあるのは、この神からの借り物

人間の眼、洞の守護

2、面足尊 世の中の温かさ火気一切の守護

人間の身体の中の温み、ぬくもりは皆この神からの借り物

3、伊弉諾尊 世の中の種子一切の守護

男子の雛形

人間の生れ出る時の種子、又その種子なる神、又種子の守護

4、伊弉冊尊 世の中の苗代一切の守護

女子の雛形

人間の生れ出る場合の苗代、又その種子なる神、又種子の守護

5、月夜見尊 世の中の骨組、構造、突く張りの守護

人間の骨突張る箇所の守護

人体における男の一の道具及びその守護

6、国狭土尊 世の中のつなぎ一切の守護（金銭のつなぎ、縁談のつなぎ）

人体に於ける女一の道具及びその守護

7、雲読尊

世の中の水気昇降の守護

人間の飲食い、出入、排泄の守護

8、惶根尊 世界の風、声、音波の守護、風の道具。

薄く、出入容易なものの守護

人間では息気の吹き分け、音声の聞え、皆この神からの借り物

9、大苦辺尊 世の中の引き出すこと一切の守護（五穀の豊穰へ、金銭の引き出し、食物粒毛等のつなぎごと）引き出しごとはこの神からの借り物

人間では出産の時子を母胎より引き出す守護

10、大食天尊 世の中の縁切り等、切ること一切の守護

人間の生死—母胎との縁を切り、この世との縁を切る—の守護

右の様な神々 右の様な神々の属性を、人体に関する素朴な考へ方と結び付けて、而もそれを病氣（身上）生活上の不如意（事情）の場合に説くのである。病気で苦しみ、不遇に泣いている時それとは何等必然的関係のない原因を持って働きかけられ、神様を道具として攻め立てられる。而も最後の頼み、一意の望みをかけさせておいて、たださへ無知な大衆である。かかる逼迫の場合、弱みに付け込まれ、希望でつられて、是非、確否、正当な判断の行はれよう〇地などはなく、そこには熱狂的な夢想が支配するだけである。而も借り物の理を次の様に説く「思慮は自由でありまして、必ずしも肉体はそれに伴

わず、一度病気を得れば心は如何に思うとも肉体の自由は失はれるのであります。これ借り物たるの証拠であります。心が貸主たる神の心に沿えば身も自由健全を授かり、反すれば、戒めを課せられるのであります。」病気は病魔のせいだと言われたが、心と肉体とのこの事実を見れば、借り物、貸し物の理がハッキリする。この事をみかぐらうたに

四つよくのころをうちわすれ とくと心をさだめかけ

四つよくにきりないどろ水や 心すみきれごくらくや

おふでさきに

人間は皆々神のかしものや 神の自由用これを知らんか (III 1 2 6)

めんめんの身のうちよりのかりものを 知らずにいては何も分からん (III 1 3 7)

思案せよ病というて更になし 神の道をせ意見なるぞよ

一寸した目のあしきも腫物も のぼせいたみは神の手引きや

とあることから考えて見ても、病気を如何に考え、そこに如何なる方法があるかが想倒せられるであろう。即ち神の属性を手際よく運用して、身上事情の原因を極めて大雑把に説明し、且つ、それぞれその事情に応じた治病法を案出し得る訳である。事実天理教教師は、かかる神々の性質、職能、守護、それから借り物の理を以って病劣者を捉へては布教している。

(三) 病理観一個々の病気の具体的説明

神観による病気の考え方のほかに、又天理教教師の常用するものに次の如き病理観が行われている。今これを挙げることは余りに繁に亘るので、一部分だけを紹介することとする。ここに注意すべきことは、一教師又少数の教師がタマタマかかる病理観によって布教していると言うのではなく、かかる考え方は天理教教師養成機関たる天理教校に於いて、「御助けの実習」として教えられ訓練されつつあると言う事である。そしてこれが、又天理王命の守護、借り物と結び付けられて説かれると言う事である。これらは、その時その場所即ち病気の具体的例に即して教えられたのであり、雑然としているが、これを便宜上公私流にいくらか整理して示せば次の如くである。

(1) 身上 (=病気)

(イ) 一般論

身体の上部の疾患—祖先、親、長上に対する心使いのあしきのため

胴体の疾患—夫婦、同輩に対する心使いのあしきため

手首、足首の疾患—子や目下の者に対する心使いのあしきため

身体の右に現れる疾患—女に関するもの、目下に関するもの。

身体の左に現れる疾患—男に関するもの、目上にかんするもの。

(口) 個々の病気

「因縁にも道が色々ある」と言うから、病気の軽重緩急、又その種類、症状によって決して一様に解釈されていないが、ここでは病気の概略的な原因を、しかもホンの一部分丈だけ記することとする。

皮膚の病 金銭、縁談等つなぎに関する故障

眼の病 よく、色情に関するもの。

耳の病 人の言うことを聞かぬから

咽喉 出すべきものを出さぬから、

胃 人と和せぬ性質のあらわれ、我意を立てて人の意を潰すから。気随なるが故に黄水がでる、心が定まらず、心が変わりやすく、早合点して理を丸呑みにし、かみわけが足らぬから、欲深で取り込みばかりで出し惜しみするから、家庭内の不円満の証。

腸 我欲強く立腹しやすいから、上から下へ流れる順序の道に誤りあるがため、上の口から下の口へ通ずる腸の道に故障を生ずる。

胃腸 意地張である、無理を言うことである。「無理な願いはしてくれな、神の受け取りでけんから」の御神楽歌は、この胃腸病の場合に最もよく利用される。

心臓 小心にて思い切り悪きため、心定めが出来ぬから取りこし苦勞をするから、他愛心がなく、出すことをしないため。

子宮病 かくれた気随気儘の心から色欲の因縁による。人に言うに言えん、聞かんに聞かせん前世この世を通じての色情の埃、故に人に言うに言えん見るに見せられん所に苦しむ。

親も許さぬ先より至急に色欲の心使い多き因縁。

夫は種の理、妻は苗代の理、我儘から夫と言う種を潰すから、夫は月（突 き）の理妻は日の理自分の気儘から月にたいする役目に間違へるから月経に変動をきたす。月に対する道を踏み外

すから月経故障—血の道となる。

子宮内膜炎 女が他処の男をよく思うから。

子宮癌 自分が姦通するか又は夫が他の女に心を寄せるを見て、その女に嘔み付きたくなったり、心がにらみ合い眼に角たてるから眼と一緒に子宮ガン（眼癌）となる

肺病肋膜 己の非行を思わず、我儘気儘なため、人を恨み、怨念の炎を燃やすから。肺病に於いては「肺病の因縁を説く」と言う大部な一冊の書物すら出来ている程その因縁が種々説かれてある。（詳細略す）

痔疾 真実誠の精神なく、誠の心が定まらんから。腰が据わらず尻が落ち着かぬ理のあらわれ。身惜しみ、出し惜しみ。出시키たないひと、ほしい、おしいのほこりのつまり。出すべき前へ出さず、入れるべきところへ入れず。

陰性—腰の部にぬくみの御守護がないから。

おし 人間が冷酷であって物を出さぬから。欲深く人の言うこと耳にもかけず、人に対する義理人情を思わずかかる行いや心使いの理が天理に迫っておしとなる。おしとなる因縁心使いは、親及びその人の前世に言うにいえん語るに語られん途を通って来たため。

その救助法は、祖先の因縁、通り方を調べ、親々の心の理を知り、父方、母方出生の因縁を極め、そして真のたんのうをし大神様の大恩と貸し物借り物の理を悟ること。

チンバ 色こと説き得るも一般的には前世からの家の因縁によるもので、先祖より恩の果たすべきを果たさず、何事も偏りすぎて気に入ったものは果たすが、気に入らぬものは恩ある人にも果たさずと言う様に片寄って通りし因縁。物事ロックに通らぬという因縁。散々人を運ばせて無理非道なことをなし、人にチンバふませるという因縁。

物売りを折角足を運んでくるに拘わらず値切り（根切り）倒し損させる因縁。心違いの理により腰チンバ。自分一がいをかたぎるカタチンバ。色情に勝手な道を歩くで、人にも傷をつけ財産にも傷をつけたキズチンバ。総じて性質の片意地で人の自由にならない人。これを具体的に示すと、本家分家で

は、分家に知識学問あり、財産あって本家の理を潰し本家に応ぜず、元々の恩の理を踏みつけたから。

相続の場合、相続人が家出し、次男が相続したり、先妻の子に相続させず、後妻の子に後を継がせる等系統順序の乱れの因縁による。嫁と舅との間に色事の間違。氣随氣儘にして色情の間違。人の財産横領委託金の費消。蔭に色情を誤り、添うに添われぬ仲と成る。不正の金私を取り込み、他人に対して慈悲も同情もない。

詳細は略するも、中風より来る足の不自由、中腰及び股の付け根より来る譬等に依じてそれぞれ因縁を説く。

ライ病 八つのほこり中、一つとして欠くる所なき心使いより来たりしもの

高慢一家つぶし、縁つぶし、金銭つぶし。

恩を知らず、恩に恩が重なる理、幾世代が重なりて現る所の持ち越し因縁である。

「なんぎするのも心から我が身恨みである程に」

「恩に恩が重なり他其の上は牛馬と見える道がある」

らい病は俗に「ナリンボ」と言う。義理も人情もなく取り込んで出さず自家を富ましたもの。又「ツブレ」と言う。ものがつぶれた、壊れた、くだけたと言う意味、即ち栄耀栄華をおした者は「つぶれ」るのである。

赤痢 高慢で、短気、〇〇の腹立ちの心使いのため。出入りの道（交際）で義理人情を弁へず、恵み施す事が少ない。賤しい情ない性分の為。

夫婦、親子、兄弟が譲れ会い、隔て心になったため。くにとこたち。おもたりの御心に沿わぬための両神の御立腹。即ち水気たらず、熱に苦しむ。又くもよみのご意見、即ち出入りすべき道具の自由用叶わずして身肉の一部が腐乱して切れて出る。何れにしても万づ繋ぎ会い、結び合いの心がない不足の心使いより、たんのうが出来ぬ神様の意見。なお赤痢の時期とその治療を少し長いが紹介しておく。

赤痢病と申しますとその発生する時期は暑い間で、別けて春過ぎより秋にかけて最も多いかと思えます。何故こうした時期に、こうした病気が多く発生するのかと申しますと、元々大神様の世界人間前一切のお働きは、南と無、出すと入れる、日と水、即ち月日は実に親神様の御守護で出来もし成りもするので御座いまして、わが日本地方一年四季のうち、春より夏にかけては、おもたりの神様の温みとしての御理の最も顕著なる御守護くださる所で、次いで秋より冬にかけては、くにとこたちの神様の水気としての御理の最も顕著なるご守護下されると聞かして頂くので御座います。そこで人間身上前一切は春

から夏にかけますと、おもたりの神様の御理により、特に内面より、外面と御活動が始まってくるのであります。秋から冬になりますとくにとこたちの神様の御守護により、特に外面より内面と御活動が生らせられるのであります。水と申しますのは、固める縮める、締まるのでありまして、秋のそよそよと涼しき風と、降る雨の加わるにつれて彼方にも実を結び、他方にも実と固まり、滞ってまいりまして、聞いては目口を閉じて小首傾け、ただめずらしいと実となってくるのであります。如斯なむ出入日水天地又母なるお抱き合わせの真実元の神、根の神様のご守護の理によって人間前一切は時と所と身とをえさて頂いているるので御座います。中にもにんげん身上は、天地のイキ即ち二親神様の理にそうて最も厚く最も深く自由用自在のお働きを下されてあるにも拘らず〇〇に出ずべき節に、誠真実に結ばれなくてはならぬ旬に自由用ならざる内に病を〇し外に病を〇し分けても数ある病の中にも赤痢という様な悲しむべく、恐るべき、人の交わりは遮断され、隔離され、然し余の父、余の母と頼むべき温み水気五分と五分の御理の借り物たる吾が身体の血肉を絞り、血肉が去って仕事はなくとはならないでしょうか。之と申しますのは、日々常にその人の行いや心使いというものが我が時と我が意と我が身との天位即ち親神様の大恩を弁へず添うべきに体を以って添わず結ぶに実を以って結ばず、出すにも入れなにも一隋な我が欲の強い、自らの欲望を達せん為には、義理も人情もなく、自分の物は出し惜しみ、使い惜しみ、人の物なら骨迄も絞り締め取るといふ、しかも親子の中ですら我が思う事は親の立場は崩しても、是が〇でも遣り通すと言うかって気儘な、しかも強情な無慈悲な心使いの人であります。描くも常々入れてもろてもいるし出してもいるのでありますから、随って血と言ひ肉と言ひ僅かな事にも燃えやすく、煮え易く腐り易く、そして虫が湧きあしなっているのであります。またこうした人間同士の因縁以って寄せられた場所ですもの、兎角その病の発生するのは大概一市一町同じ場所から年々発します。押して神様の温かき御理を悟らして頂くので御座います。して又、私の道すがらよりの経験ですが、この病の因縁の特徴として自分一人として言わしめ思わしめるに、ああすべき事こうすべき事の理解は持ちながら、奇妙に親子夫婦兄弟並びに人と対立すると力み合い、擦れ合い、うるさい汚い心使いの一切発生する前世今世の因縁心使いを持ち越した性の人間であつてさればこそ嘔吐も下りも神の残念立腹との御言葉も御教示下されしものと拝察させて頂くので御座います。要するにこうした因縁心使いに迫つて赤痢となるのですから、之を諭すに天地の恩、即ち大神様の大恩、貸し物借り物の御理を充分説き悟らしめ、而して前述の因縁使うに報ゆる懺悔をなし、一家一手一つに何事にもこのたんのうをして、出すに誠を以ってし、入るに実を以ってし慈怨寛大温情を之の事とせしめる事が肝要かと思わして頂きます。以上の様に特におし、ちんば等の不具、病氣や急病の如く、その由つて来る原因が真とも

出なく又人に憚る様な病、先天的で不憐の加わる様なものに就いては、人は想像以上に神経的となり、性情の弱点、前世の因縁、祖先の悪業、自分の知らぬ間の罪障などのせいだと指摘されるとツイその気になるのである。これを道徳的訓戒としてだけならまだしも、その因縁除去病気の治癒の唯一絶対の方法を「お尽くし」「お運び」と言う「たんのう」に求めて身代（文字の通り身の代わり、身は神からの借り物までも巻き上げる所に悪辣さがある。

(①) 事情 (=心意、精神上の苦惱、生活上の不如意)

(イ) 本人直接受けるもの

夫にして妻を軽んずれば 腎臓、膀胱、花柳病

妻にして夫を軽んずれば 頭の病、子宮病、痔病

地道に反する妻は 地の道

婦人にして怨恨、嫉妬 ヒステリー、子宮病

言語の粗悪、片意地 神経痛

不倫、不徳の者 膀胱

夫を侮り、他夫を思ふ婦人は 乳病

義父母への孝養を怠るもの 乳病

(ロ) 家族子孫等の受けるもの

家族親戚の一人が天理教に入信して、他の者がこれに反対する時、この手はよく用いられ、特に夫や妻、子供の病気の時にはこの一手で押すのである。なほ、十五才頃以下の子供の不幸疾病は親又は祖先の悪行為、悪因縁のためである、とされる。

親子でも夫婦の仲も兄弟も 皆めいめいに心ちがうで(IV、7)

前生の因縁よせて守護する これは末代しかと治まる (I, 74)

子の夜泣き思う心はちがふでな 子がなくでない神の口説きや (III, 28)

親親の心違いのないように 早く思案をするがよいぞや

母親の妊娠中に我慢で人を恨んだりすると、この因縁により 子供は肺病、肋膜炎 (後には眼疾も患ふ)

子にして親に逆らへば 顔面や脳の病にかかり

慾に走りて親の意に反すれば 眼病

忠告、訓戒を軽んずれば 耳の病

夫の言行をおさへる妻の子には 脳膜炎や引き付け

夫の不満を言ふ母親の子には 頭に腫れ物

妻のなすことに反対する父の子には 処脳症

(八) 雑

盗難、遺失 他人の労力、精神を徒勞せしめて報いを怠るの因果

自然の与えを待たずに無理な所得をなしたる返し

火事 熱と熱との擦れ合い

火難 不平、不満、家内軋轢の証

姑に苦しむ嫁 その親が寡って姑として嫁と不仲であった

夫に冷遇にせられるもの ことの因縁また同じ

配偶者の死別。不慮の死天の慈悲、神の貸し物に対して喜び返しをしなかったため

夫に捨てられ、妻に逃げられ、老いて子に見捨てられるもの 自然の配偶を喜べなかった返し

養子、養女の出踪、別居 虐め

跡継ぎ男子の夭折。女子ばかりの子 人様の家庭に難儀をかけたことのある因縁

双生児（畜生腹） 苛め、人の家庭を破壊したもの、畜生の様な行為があった因縁

天理教官長中山正善が部下全教会を動員して材料を集め、これを整理して東大大学部卒業論文「天理教伝道者に関する調査」（後に出版）はよき意味においても悪しき意味に於いても色々の場合余にもしばしば引用せられるものであるが、それによると入信ので動機が次の如くに分けられている。

天理教教師 一萬二千二百四十八人中

身上によって入信せらるもの 六一.二六%

親譲りの信仰 二十.一二%

事情によって入信せるもの 二.〇八%

となつて居り

更にこの身上による入信者を分類すると

自己の病象が救われたきため 四七.六五%

家族の病象が救われたきため 四八.九七%

家族、知人の死によつての入信 三.三八%

と分けられ

事情による入信者を見ると

家族の不和 三三.三八%

経済的失敗 二一.五七%

社会的落伍 二十.〇〇%

災禍 一〇.九八%

などとなっている

これを総括的に表示すれば次の如くである。

これを見ても天理教が如何に病人のかぎ出しに躍起となり、これによって今日の大をなしたかを知り得るのである。

以上身上事情に就いて一々は挙げなかったが、これに対する方法を一言にすればこうである。「因縁は先廻りする。恐ろしいことや、一日も早く天理親神様からの借り物の生命、身体、財産をお返ししなければならぬ。先ず身代即ち財産は身の代わりとしてお尽くしをしなければいかん、因縁は先廻りする、恐ろしいことや」と。又曰く「因縁なら通らにやならぬ通さにやならぬ」と。(おふでさき)

(四)布教上の用語

以上教祖観、神観、それに病理観と一列の系統に於いて考え、これを如何に活用して布教するのであるか。病人をとらえ、不幸な家庭を訪問して、その病象、不幸の成ってくる系図及びそれを除去する方法を一流の執拗さを以って説き教え、時に迫るのである。この時の具体的方法を最もよく示す言葉を拾って見る。

天理教では、如何なる病気も心の埃から来るのであり、それは神がその人をお道に引き入れる手引きであり、埃なることの警告であるとする。この点「大本教の、神から綱をかけられた」「ひとのみち教団」の神示「しらせ」と全く同様である。然し天理教ではこれを素朴な言葉で種々に表現している。ひきよせ、おてびき、お手入れ、御意見、せきこみ、おためし、何れも神がその人を自分の手下へ引き寄せ、その心をためさんとして忠告し、且つ急いでいる、と言う意味。

病の原因は言うまでもなく、

因縁の理を悟れ

深い因縁の人(この因縁からは、逃れられない)

悪因縁を切りよい因縁をつなげ

因縁は先廻りするからのがれられぬ。

因縁なら、成るも因縁、成らぬも因縁

理は御道 御道は理

理をふき分けよ

理は千里一跨ぎ

かくの如き攻め道具を使っておいて金品を巻き上げるには体裁のよい言葉が使用される。

おつくし おはこび おつなぎ 理をたてよ

御返しせよ たんのうせよ 理をつけてお返しせよ

運び方が足らぬ時は、信者を「神の用木」とおだて、「神の道具」に仕立て、或は「神様の仰せ」「地場」としておどかし、上級教会や本部の命令には絶対服従を強い（その訓練は後に記す）命がけで金銭を運ばしめ、これが無くなれば日の奇進で労力搾取と最後の血の一滴まで絞り取る。

(ア) 所謂教義に就いて

今迄の叙述乃玉説的に於いて大要はつくされていると思うのであるが、天理教が自分の教義とせる、かしもの、かりもの。ほこり、いんねん、たんのうに就いて体系に述べて見よう。

(イ) かしもの、かりもの

人間の身体、生命、所有物一切は皆親神たる天理王命からの借り物である。借主は貸主へお返ししなければならぬ。しかも利子をつけて。「おふでさき」に

人間は皆々神のかしものや なんとと思うてつこているやら

人間は皆々神のかしものや 神の自由用これを知らんか

胎内へ宿しこむのも月日なら 生まれ出すのも月日世話どり

とあり、更に神言に

面々心でどうもならんが借り物と言う

人間身の内は神よりの貸し物 人間にとっては借り物

かしものかりものはこれ教えの台

(ハ) ほこり

人間に心身共に色々な故障が起こるのは、八つのほこりが出来て、親神様が入込んで働けなかったり又親神様の思し召しに反するからである。八つのほこりとは次の通りである。ほしい 心も尽くさず値も出さずに物をほしがる心

をしい 尽くすべきこと、働くべきことを、怠たるにして物惜しみ、骨惜しみする心

かはい 我が身、我が家ばかりを可愛がる心

にくい 我が身勝手の思案から人を憎む心

うらみ 我が身に都合の悪いことをされたからとて人を恨む心

はらだち 心の小さい所から思う儘にならないとて気儘癩癩を起す心。

よく 邪な心から我が身の利得のみを思案して物事を振舞う心

こうまん 人を見下げ人より豪いと高ぶる心

この八つのほこりの解釈が如何に搾取に都合よきかを看破するのは容易である。そして、身上（病気、病難）事情（不時、災難）何れもこのほこりのせいであるとする。「病の元は心から」「難儀するのも心から」。故にこれから助かる道は、ほこりをとりはらうことである。その実際はほこりの解釈説明を見ればよく分かる。

（ハ） いんねん

天理の親神様は、吾々に（心ひとつの理）を興えてくれているが、それだからとて心のままにはならない。この（心一つの理）が親神の思し召しに逢い天理に沿えばその恩寵に浴し、守護がいただける。親神の思し召しに反し天理に背けば「身上事情」のお知らせを貰う、故に心の立替をしなければ救われない。吾々の境遇、人事に於いて予期しないことがあるが、それは、いんねんの現れに過ぎぬ。吾々は「心ひとつの理」によって日々に積む因縁の現れである。「成るもいんねんならぬもいんねん」「いんねんよせて守護する」このいんねんで、よい方のを「白いんねん」悪いのを「悪いんねん」と言い。前者をつなぐため後者を切るために、色々「たんのう」をしておつくしをしなければならぬ。

なほここで「白いんねん」をつなぎ得るのは、つなぎの神の守護、又は借り物であり、「悪いんねん」を切るものも亦切断の神のそれらであることを想起しておくの要がある。

（天理十柱の神の守護、はたらきはすべてかくの如くに運用されているのである）。

（二） たんのう

前生のいんねん、その日その日の因縁からは免れ得ない人間は、「いんねんなら通らにゃならんとおさなやならん、通ってはたさにゃならん」の教示の通り一切をいんねんの現れとして深く親神様の思し召しの程を熟慮し、「因縁と言う、因縁一つの理はたんのうより他に受け取る理はない」との神言を悟り、おはこび、おつくしをして、悪因縁の切り替えにたんのうしなければ何時までも苦しみ、救われるときは来ない。

（ホ） まことしんじつ

人間の心は埃の心を使って「悪いんねん」の種を播きがちである。かく心が動揺するのは、未だ真に「心の立替」ができていない征據である。それでは神様の思し召しに叶わない。故に始終心に鞭打って如何なる事であろうとも「たんのう」して「ほこり」を積まない様になると同時に、進んでひのきしんに励まなければならぬ。かかる真の心の立替を親神は、「まこと」とも「しんじつ」とも教えてであると

言う。かく心の立替をして誠真実の心になってこそ親神の思し召し、即ち天理に副うこととなる。「誠一つは天の理」かくて親神の守護がある。「日々受け取る中にただ一つ誠一つが天の理、天の理なら直ぐと受け取り直ぐと返すがひとつの理」「真実の心を神が受け取ればいかなる自由用もみなして見せ」 「月日より真実試み定めて、受け取り次第返すぞや」故に又、逆に言えば、守護をいただけないのは、まことしんじつの心がたらぬからで、「実が誠か、誠が実か見えねばわかるまい」との教示があり、身上事情を援けて頂くためには「誠と言う思案があろう、実という所があろう」と御説示なし下されあると言う。

(六) 基本教義書

(イ) 泥海古記

人間創造に当たって、月日両神が人間の道具雛形となるものを「無理に貰い受けて食い心味わい」とある。この調子は、神様がこれとにらんだらどんなことがあろうとも貰い受けてその意に従わすのである。又みき女に神懸りのあった場合にも、神はその身体を貰い受けると言った。これを聴かなければ御家断絶である。神の手引きのあるのは、即ち事情、身上のあるのは、これ神が貰い受けるのである。善事がこの調子である。

このものを かみがひきあげくてもて だんだんしゅごうにんげんとなし (VI 1 2 4)

泥海古記全体の筋と、教祖の神懸りと最初の神観とを併せ考えればよい。

(ロ) おふでさき

これも一部分だけを列挙するにとどめる。

(①, 27) (2, 7) (3, 28) (3, 41) (3, 110) (3, 126) (3, 137)
(4, 25) (4, 42) (4, 109) (4, 110) (4, 88) (6, 108) (14, 21)
(14, 77)

(ハ) みかぐらうた

これも全部といってもよい程心定めをして、おはこび、おつくしをする様に進め時には突離しても見たりしている。その中から目ぼしい物を拾ってみる。

二下り目 八つ

三下り目 四つ、六つ

五下り目 二つ、六つ

六下り目 六つ、八つ

七下り目 一つ、三つ、四つ、五つ、六つ、八つ

八下り目 四つ、六つ、八つ、九つ

九下り目 四つ、五つ、七つ

十下り目 四つ、七つ

(二) おさしづ

おさしづとは、意味不明又は意味を汲み取る事容易でない場合が多い。然し其れだけ暗示的となり得るし、搾取のためには却って都合よき場合が多い。

もともと医者はいらん、薬飲むこといらんと言うのは訓えにないで、もともと医者にもかかり、薬も飲み、医者の手余りを助けようという。薬を以って治してやろうというのやない。脈を取って助けるのやない、医者の手余りを助けるのが台という事情、身情は道の花。

天理教教義に於いてこれまで述べてきた所は、実際に於いて本教の教師養成機関たる天理教校の教科内容に於いて如何に説かれているか、これをその教本の中から一部分だけを拾って見る。

貧のドン底へ落ちきれ、谷底へ、これ雛形の道 (教祖伝講義二十頁其他)

元の理を知らず、理をたてぬから (おふでさき講義二十四頁)

この世は理で攻めたる世界理のふしんをせよ (同 三十五,三十九頁)

身上事情は神様のなさること (みかぐらうた講義二頁)

神は身上事情を以って人に迫る (同 三十六,三十九頁)

出すべきものを出さず尽くすべきことを尽くさずに (同 二十七頁)

無理な願いをしてはいかん (同 二十七頁)

病気を助けてくださいとは欲だ (同 三十六頁)

勤めの理を欠いてお助けはできぬ (同 四十二頁)

徳をいただくには其れだけの価を出さねばならぬ (同 五十頁)

神様が取り上げてくださる道筋にはそれぞれ筋がある (同 四十四頁)

筋とは理である、理を欠かず理をたてねばいかん (同 四十五頁)

たんのうに魂をうちこめ (同 五十頁)

教命のために働けば子供や家の事はかまはずとも神様が看てくれる (同 二十七頁)

親一代のたんのうが子供の幸福への種蒔 (同 五十一頁)

親のたんのうと子の出世 (同 五十二頁)

一粒万倍の理 (同 六十五頁)

土持に限らず御普請に間に合う事なら

御金で御産れ、材木で御産れ、御地場さして運び込め（同六七頁）

なほ教本の「伝道地誌」に於いて、全国を地方別に分け、その各地方に特に多い病気、風土病、地方病を丹念に調べ上げ、これを心得ていて、これに向かってにほいかげんとする様教示していることもその布教の精神と方法とが如何なるものなるかを知りえる有力なる手がかりとなるであろう。例えば

九州地方 特殊な病気死亡率とその病気の種類をよく調べよと言ひ

具体に表示（48頁）

青森県 アカベ（眼疾）（38頁）

山形県（最上川沿岸） つつがむし病（39頁）

鹿児島県 中風（飲酒、特に芋焼酎を飲むため）（73頁）

鳥取県 肺病（雪国のため）（95頁）

島根県 にんこ（98頁）

四国一般 ライ病とめくさり（眼病）（102頁）

松山市 かつたい（115頁）

高知市 中風、黄疸（飲酒）（116頁）

の如くに各地の特別の病気を挙げて、これに対する用意をなさしめているのである。これまで、冗長に亘って述べてきた所を要約すれば、一つの具体的な病気は、埃の堆積か前世の因縁かによって起こる。故にこの埃を払い、悪因縁を切るには懺悔と奉仕の道を、具体的には「おつなぎ」「お運び」又は「ひのきしん」によって積み、親神の守護をいただかねばならぬ。と言うにある。人間の弱点である疾病その他を機縁として生活の転機を図らんとするのは悪いことではない。然し天理教の場合には、恐るべき悪意と悲しむべき弊害が必然的に伴う。

（②） 病気の原因となった埃、即ち物欲を除去することによって救われるという教理でありながら、その物欲の結晶たる物質を献納せよ、その交換条件として疾病が救治されると言う矛盾、そしてここに悲しむべき生活資力の放棄と私経済の破壊が起こる。

（③） 医療の功を認めず、これを否定し、療病の唯一絶対の方法を「たんのう」に求める結果、無知から起こる不自然な生活をなさしめる。安静を必要とする結核や腎臓病に日の寄進なる奉仕労働を強い、食生活を無視させる等治療の目的に逆行せしめる。現に丹波市町は日本一の確率の結核死亡率を示している。これは、奈良県衛生深砂川技師が統計の上で発表した。阪大教授今村荒男博士は、日本一とは世界一の死亡率であり、迷信禍宗教悪の恐るべきを指摘し、これを学界及び大衆に発表して天理教本

部の猛省を求めた。

(二) 文化水準の低下

総じて宗教には、ものの考え方や説き方に一つのまとまりがあり、独自の調子を持っている。日常生活のがごく些細なことに関してまで一通りの説明なり解釈なりがあり、これに対する態度に一貫性がある。その見方、解き方が間違っていようと不十分であろうと、曲がりなりにも一つの系統があり、特殊の調子を持ったものの見方のあるということ、そしてどんな細かな事でもそれに基ずいて解釈し、そういう点から判断し、あらゆる事象に対して独特の見解を進め、且つそれを信仰的に把握してしかもそれを実践に移す所に、宗教と言うものの特色と深味がある。であるから、以上のような天理教の考え方や態度、人事百般に対するその考えと解き方は、単なる観念上のそれではなく、生活上の態度や移動を規定するのである。故に智性の無視に基ずく猪突がある。ここに時代一般が正当であり合理的であるとしているような通念や、観念と相容れず文化の水準に達せず、科学的常識と真理に背馳して物を運ぶ狂信さ、並びにそれに基ずく所の個人的社会的な諸々の弊害が相伴う。

第三 天理教の組織と搾取

天理教教義の根本は、かく搾取の外に何物もなく、ここに教義上から見た天理教の性格がある。かかる性格が教団の制度や教会組織の上に於いて更に如何に具体化して実際上の機能を発揮しているか。以下これを調べてみよう。

天理教には天理王命及び教祖の霊を祀り、教義の宣布をなし、祭典を執行する機関たる教会本部及び一般教会があり、これに教師及び信者が所属する。かかる教義及び儀式の執行機関の外に、教庁、教庁出張所、教務支庁、布教管理所、伝道庁の教団行政事務執行機関がある。更に外郭団体として天理青年会、同婦人会、よのもと会等教勢翼成機関がある。

(一) 教会組織

(イ) 教会本部

天理教との根本的信仰は、月日両神がいなぎ、いざなみを人間の種子苗代とし他の八神を道具として人間を創造するに際し、いざなみが枕に寝た御神体の中央が甘露台であり、これを中心とする信仰にある。而してこの甘露台の据えられてある奈良県山辺郡丹波市町三島の地一帯は御地場と呼ばれ、人類の親里として同教信仰の中心地をなす。ここに天理教本部がある。そしてこの地は「旬刻限」、「屋敷の因縁」、「教祖魂の因縁」と言う立教の三大因縁と教義の根本義からして教祖及びその血統を継ぐ管長と共に信者が崇拜する一大標的の一となっている。従って御地場へ来る事は、自分の造られた故里への帰還であるとの意味から「帰参」と呼ばれ、これが宗教的義務であり、教会本部へ参ることは欠くべ

からざる行事となっている。この本部に於いて祭典に執行、神鏡、神符、神供の下附、受訓等が行われる、これらの内容は後程明となるのであらうが、ここではただ教会本部なるものが、人類の親里としての地場にあり、ここへの帰参が宗教的義務であり、ここに於いて信者は天理教徒として最後の磨きをかけられ、天理教信仰の白熱する中心地であると言う事を知ればよい。

(口) 教会の種類

教会を分かって五種類としている。即ち

大教会 信徒 一万戸以上

中教会 信徒 五千戸以上

分教会 信徒 二千戸以上

支教会 信徒 五百戸以上

宣教所 信徒 百戸以上

右の中、大教会、中教会は本部直轄で、この直轄教会を上級教会とし、それ以下の各下級教会は上級教会に所属し、これに絶対的服従をなし「理の親」として仕える。この「理」と言うことは天理教内に於いて微妙にして重要な意味を有するもので、この「理」の結帯と連鎖とによって順次教会本部に迎合する組織を以って堅固に統制されている。教会の各階級は信徒の戸数に従い請願によって教庁より許可せられるのである。しかもこの教会系統は、他宗教に見られる如く全国を行政区画に区別せず、教会が其々の単位をなし国内は勿論遠く海外にいたるまで発展せしめる自由競争主義を採っている。

例えば、東京市内には東大教会、日本橋大教会、麴町大教会があるが、その隷下にある分教会以下の教会は、必ずしも東京市内又はその近辺にあるもののみではない。又東京市内に在るものでもこの三大教会に属せずして、他の大教会に属するものが沢山ある。即ち大中教会の隷下にある教会は全国に散在し、又同一地にある教会も各異なつた直轄教会に下に属し、かくして全国各地の下級教会は、相錯雑して存在し、何れも各上級教会の異なる指導精神によって日夜布教戦線に必死の活動を続け、信者獲得に邁進しつつあるのである。天理教の驚異的成長はこの自由競争政策を採れる教会組織に負う所甚大なるものがある。直轄教会は地場に帰参する所属部下教会の信者を宿泊せしめ、一面、教会本部、教庁方面との連絡にあららしめるため、丹波市三島の地に、その勢力に相当する信者詰所を経営している。

(その数約百ヶ所、収容人員約二十万人) 教徒としての訓練はこの詰所に来た時、又そこに至る間に於いて仕上げられる。

(二) 教師資格

天理教教師任用分限規定第二条に

教師ハ左ノ資格ノ一ヲ有スル受訓者ノ中ヨリ之ヲ授任ス（点線村上）

とあり、授訓が最大要件たる事に注意するの要がある授訓に於いては後程これに触れる。その他、教師資格の明細や、等級は必要に応じてその都度簡単に触れることにする。

（三）信者に対する対する搾取

（イ）信者の獲得方法

天理教に於いては、未信者に働きかけて信者たらしめる行為を一般的に「匂ひ掛け」と言う。そしてこの「にほひかけ」をなす信仰的義務を負い、且つその資格あるものを「お授け人」と称し、隼教師の資格あるもので、「神の用木」とはこれを指す。かく信仰的義務を負い、且つ「道の用木」人の「にほひかけ」を特に「助け一条」と呼ぶ。そして天理教では、「助け一条」に邁進して人助けをすることによって助けられると教えるが故に、信者の多くは、一般教師の「匂ひかけ」を待たずして進んで信者獲得の拳に出る。所謂、教師の外にかかる信者たる準宗教教師の活躍、しかも宗教的信念に燃えて執拗に「助け一条」に邁進するその活動は、天理教が短期間の間に飛躍的に発展をなしたる一大原因であつて、これに外郭団体が相呼応し、或は戸別訪問に、或は路傍講演説に、或は清掃等の集団的実践に驚くべき組織的訓練と統制を以って、活発なる行動をなすのである。

戸別訪問=未信の家庭を戸別に訪問するのであるが、天理教並びに同教教師に対する反感は社会に一般的であるし、これを蛇蝎の如くに嫌忌し居るものも少なくはない。

そこで普通は宣伝用のパンフレットやリーフレットを持参しては「匂い掛け」、拒絶されればそれを進呈し、万一これに迎合してくる様な気合が見えれば、滔々として「泥海古記」の人類創造、十柱の神の守護、貸し物借り物、八埃、因縁の教義を説く。然し効果は微温的で他日入信の動機をなすに過ぎない。

病家探求—そこで目標は病人及び病家に称される。その方法としては病人怪我人の後をつけたり、飲食店、商家の小僧、道端に遊べる児童に尋ねたり、産婆の出入り、医師の人力車夫、長屋の井戸端会議等に注目せよと指導されている。隠して、病家を見分けると拒絶されても何回でも執拗に訪問し、一寸した家事の手伝いをしたりして、「お話をさせていただきます」と言つては天理教を説く。その真摯な態度、不撓の精神に屈服せしめて、病氣災難は自己及び祖先の悪因縁のためであることを知らしめ、終に入信の決意を抱かしめるにいたるのである。

（ロ）信者獲得の際の搾取

かくの如き病者獲得の際に同教教師が説く所は、己に紹介したる如き病理観である。

曰く、

「元々人間は、いざなぎ、いざなみの両神が雛形とおなり下され、他の八つの神様の働きによって、人間は作られたものであるから、人間の生命財産はみな神様からの借り物である。それなのに、限りない欲心が起こり、即ちほしい、おいしい、・・・・八つの埃が積み重なっているから、神様が入り込んで守護して下さることができず、故に「八無ヤム」「八迷ヤマイ」となるのである。」と「泥海古記」や「おふでさき」を説いて、個々の病状に同教一流の索絶付会の説明を加えて搾取の伏線を張る。そして、元来親神様はただ子供可愛いの一念から、身上によって心の入れ替えをする様、その機会をお与え下さったのであるから、病の元であるほこりの心を洗い、そのほこりがたまり、塊である金銭を親神様におつなぎし、親神様におつくしをして悪い因縁を切っていただくかねばならぬ、と献金の決意をなさしめる。かくして病状はかばかしからざる時は、まだまだ埃が取れず、おつなぎが足らぬから、神様の御守護がいただけぬと威嚇し、半信半疑躊躇するものには、それを実行せば必ず助かると半ば脅迫して信ぜしめ、遂に分に応じ、多くは分に過ぎたる数百円、時には数千円の献金をなさしめるのである。而して偶々快方に向かった者には、最初の心定め金額財物を出さしめ、更にそれ以上の献金を徴憑しこれをなさなければ病状は逆転悪化すると攻めるのである。

(ハ) 信者の信仰過程に於ける搾取

A. 一般的なもの

教費—信者一戸に毎月 五—二〇銭を教費として所属教会に納付（内一銭は上級教会へ）

初穂—農業者、収穫の時米又は麦一～三升

商業者、毎月一日の最初の収入

会費—天理教青年会、同婦人会、よのもと会に強制加入せしめ、毎年会費金一円納付

B. 特別なもの

信徒と教徒—信者を分かってこの二種と巢。教徒とは信徒にして受訓を得、教会長の稟申によって管長より証忍状を下付されたもの。死亡した時はその霊を所属教会の祖霊殿に祀られ、永世祭典を受ける特典がある。

受訓—お授けとも言う。信徒にして天理教本部に参拝、即ち磁場へ帰参して本部員のつ教話（御仕込み）を聴くことで、一回（初席）から九回（満席）まであるか通常これを「別席運び」又は「九度の別席」とも言う。なほこれを「別席」とも言うのは、このおさづけが極めて重要な意味を持っているがため、席を改めて、別席に於いて訓練をするとの意味からである。そして十回目を特に別席と言う事もある。これ即ち天理教徒としての更生であり、ここに教徒としての最後の磨きをかけられるようである。

この受訓の間は、地場にある上級教会の詰め所に宿泊し、信者の常に随喜湯拝してやまない（教祖存命の理）のある地場の空気を呼吸し、麓を連ねる詰め所を見、或は神苑に遊び壮大なる神殿、教祖殿を仰ぎ、本部員の諸先生に接することが出来、生き神様たる管長を仰ぐ機会に恵まれるのを無常の光栄とする。且つ、詰所にあつては係員や御互同士、お互いに肉親以上の親しさを以って相接し、数ヶ月を宗教的共同体生活に過し、又出迎へ、見送り、案内し、又「ひのきしん」の労力共同によって「一手一つ」に結合される結果、益々信仰心に拍車をかけられ、帰参の都度種々なる土産物を持参し、詰所、上級教会、教会本部などの対して多額の献金をなすにいたるのである。

受訓の内容—この時の教話、即ち本部員の「」は、「御仕込み泥海古記」、「おふでさき」等の同教最高教義書に基き、天理教本部は人間創生の故地として、世界人類の親里である旨を強調し、親神の絶対なる守護を説き、別席を運ぶ所以のものは、「助け人衆」として生まれ代わるためにお地場に帰参したものであり、「助け一条」のために粉骨碎身することは、やがて自己の悪因縁を切る道なりと教え、必ず新しき信者を獲得しなければならぬことを強調する。而して教徒としての本分をつくさんとするれば須らく「教祖雛形の道」を實踐躬行し、仮令世人より嘲笑輕侮せらるも、物質的生活に恵まれずとも、どん底に落ちきつて、「おつくし一条」の道に「たんのう」すべきを力説し、他日教会長等の行わんとする徹底的搾取を容易ならしめるための恐るべき準備工作を施し、他面、毎回受訓料金二円を本部に徴収する等。誠に一石二鳥の名案を長年に亘り実行しつつあるのである。かかる受訓料を本部に納付するだけでなく、受訓の都度上級教会に於いて「承認証」の捺印を受ける制度があり、そのためには、毎度五十銭以上の謝礼金を必要とする。而して「満席」の際は上級教会、教会本部へ献金すると同時に、管長、管長母堂、管長夫人を初め受訓係り、本部員、同夫人、更に受付子にいたるまで各人に対し、「お包み」と称し、包み金を御礼として差し出す習慣がある。管長中山正善が住友男と関西に於ける多額納税者の首位を争い、管長母堂中山玉恵が均しく多額納税者の地位にある主な財源は、この「御包み」金が過半であると想像される。また本部役員等に於いてすらその傳給は小学校教員のそれに足らざる程なのに、その生活の豪奢は教会を持っていることとこの包み金によるのである。一人の信者が受訓の都度必要とするこれらの御包みは総計五十円を下らないと〇く。

昭和九年末に於いてこの受訓を完了した「お授け人」は二六万四千九百人の多きに達している。

別科入学—特に信者を獲得し、その信者又はその家族が身上事情で困窮せる時は、ころを奇貨として教校入りを奨めるのである。即ち独特の因縁話を持ちかけて献金の外に「神の用木」として「助け一条」に邁進しなければ助からぬと説き、遂に家業を放棄し、教校別科に入学せしめるのである。別科入学多きはこのためであつて、何れも「因縁」の恐ろしさに脅迫せられた結果に他ならぬ。別科生活六ヶ月の

食費、教服、ひのきしん服、授業料、卒業の際の教服、詰所方面への謝礼公費は合計約二百円を要し、如何に無理算段してもこの金の出来ない者は家財道具を売り払うはまだしも、娘を売り飛ばしたその身の代金でさえある場合も決して少なくない。更に別科卒業と同時に権訓導に補せられんとする時は幣帛料壹拾円（以下）を納付しなければならぬ。しかもかかる公費徴収の必要上、別科生は通勤を許されず、必ず所属教会の詰所に起居しなければならず、詰所の徴収する費用だけで約は百円前後である。詰所はこの利益と、地方より帰参する信徒の謝礼とによって維持されている状態である。

以上によって我々は、天理教信者が如何に多く因縁の巧妙極まる搾取政策によって家財を蕩〇し、家屋を破壊し、個人経済を破壊しつつあるかを見て瓢然とするのである。

（四）教師に対する搾取

（イ）教師資格と受訓

すでに教師資格の個所に於いて指摘しておいた如く、天理教教師たる者は受訓者たることを第一の要件とする。即ち、教師に任用されるのは同教信者中、教師任用分限規程に完むる資格を備へ、且つ受訓を得た者にして、所属教会長の推薦ある者に限られている。この受訓が記述の如着物であることを知れば最早冗長の説的を要しない。そして教師に任用される時は、10円以内の幣帛料を教庁に納付しなければならぬことも前に記した。

（ロ）教師の等級と種類

教師の等級は大教正たる称号を一級とし、以下十四階級に分かれ、最下級を権訓導とす。而してこの等級は何等報酬手当等物質上の支給なく、本部の取扱にも殆ど実質上の等差を伴わない。

本部員、準本部員と称するものがあり、これらは教師資格や階級を超越して一般教師の上位にあり、指揮監督権を有するのである。即ち教師の名目上の階級と実権とを峻別していることに注意すべきである。

而して教会本部、若しくは一般教会に功労のあった者の子孫は、常に「理の親」として父祖の職と地位と権能とを世襲するのである。

序に「理の親」と言うのがあるが、これは、信徒の最初に入信した教会、又は教会長を指し、これには「理の親」として服従信〇しなければならぬ。そしてその信仰過程に於いて所属教会の任意選択を許さず、従って教師間に於ける信徒争奪の如きは絶無である。もって述べた様に、教会同志の間には自由競争を採り、信者に対しては教会の任意選択を許さないあたり、その組織の巧妙感歎の外はない。

教師の区別を表示すればこうである。

教規による分類　大教正　一級

権大教正 二級
中教正 三級
権中教正 四級
小教正 五級
権小教正 六級
大講義 七級
権大講義 八級
中講義 九級
権中講義 十級
少講義 十一級
権少講義 十二級
訓導 十三級
権訓導 十四級

教内的分類 管長

本部員 直轄教会長

準本部員 直轄教会長

会員 分教会長

教徒 = お授け人 = 準教師の資格

信者 =

信徒

(ハ) 教費の徴収

教会から教費を徴収する（本会本部へ）だけでなく、教師からも徴収する（教庁へ）

教正（一級 = 六級） 年額金拾円

講義（七級 = 十二級） 年額 三円

訓導（十三級 = 十四級） 年額 壹円

(二) 本部の対下級教師政策

教校別科を卒業して、将来宣教所たらしむべく布教せる集談所の教師の如きは信者と均しく、上級教会及び教会本部の搾取の対象に外ならぬ。これら集談所の教師に対しては何ら生活上の援助保証を与えてないにかかわらず、本部（１）及び上級教会の経営する事業に対して責任支出額を割り当て（２）別科入学者、受訓者希望の推薦方をし（３）本部帰参の団体募集に関する責任員数を賦課する等の強制がある。

次に宣教所者に対しては、ただ僅かに所属信者の献金する教費の一部、及び葬祭の幣帛料によって推移せしめてはいるが、集談所教師に対すると同様の（１）（２）（３）を強制し、若しその責任額、責任員数に達せざる時は、何れも宣教所からの私財借財によって出資せしむるを常とする。故に教師は、個人としては勿論、宣教所としても本部の命令、教団事業の増営、回を重ねる毎に推移困難となり、その多くは借財によって保たれているし、教師も借金によって辛うじてその生計を営んでいるに過ぎぬと言う現状である。故にその必然的帰結として、信者に対し、威嚇脅迫等、強硬なる手段に訴へて献金を迫り、或は新しき搾取の目的物たる信者獲得のために布教戦線に狂奔せしむにいたるのである。

*** **

我々は右に於いて、天理教本部の信者及び教師に対する陰険なる搾取の事情を検討して来た。然し百尺竿頭更に一步を進めてその実績の好ましからざる時、最後の手段として持ち出す所のものを考察しておくの必要がある。そは何ぞや。教義の所で指摘しておいた「教祖の雛形の道」これである。「教祖雛形の道」とは、表面的には美しいが、実は教祖が徳川末期、めまぐるしく転換する社会情勢の変化に適応し得ず、時代の進みから取り残されて中農階級より没落し、神懸かり後益々貧窮の度を加え、遂には家財全部を売却し、辛うじてその日々の生活をなさざるを得ないような最低の生活に陥って、生活苦を如実に体験セル状態を潤色して、人心救済のため進んで貧のドン底に落ちきり、更にその所説の奇矯のため、官憲の弾圧かに苦吟した受難の過程を巧みに脚色して、搾取の手段に仕上げたものに外ならぬ。天理教はこの「教祖雛形の道」を強調して、信者及び下級教師に対し、家財全部を巻き上げ、時には娘を身売りせしめることすらあるのである。

例えば、本人及びその家族が不治の病に呻吟し、不慮の災難に遭遇せる様な時には、例の因縁話を強調して脅迫し、神への「おつなぎ」の足らざるを指摘し、「教祖雛形の道」を持ち出してくる。即ち「助け一条の道」への突進を強制して、別科への入学を説く。かくして家屋敷をたたみ、家業を捨てて、家財全部を提供せしめて教校に入らしめる。「一列子供に生涯不自由せぬ道をつけるのや」の神言はそれの内容であって又次の様にも説く。

「親兄弟や妻子の事も考える出ない。堪能をし、御道のために尽くせば、後は神様が守ってくださる、教祖様はすべてのものをお与えになって谷底へおりられた。親の堪能が子供の幸福への早途である。道へのいそしみが祖先からの悪因縁を切る唯一の方法である。」と、かの天理養徳院の如きは、かくして零落した天理教教師の寄る辺なき孤児、教校に於いて〇れた不幸なる信者遺児の余儀なき収容所に外ならぬ。決して一般社会事業の〇き孤児の救済機関ではない。又一般布教師、集談所の教師、宣教所等の下級教師が布教の実績挙がらず、行き詰りの状態にある時は、「教祖雛形の道」を実行しないから、神が働かないのだ、「お助け」の成績の挙がらないのは当たり前である。まだまだ働きが足らぬ、教祖に倣ってドン底へ落ちきれ、と叱咤する。神言に「我が身どうなってもという精神で働くなら神も働く、何いわいでも神が受け取る」とある。尚も道の用木として人を助けんとするならば、自己の欲心から捨ててかからねばならん、家財を売り払ってから神様におすがりしてお助けをさせていただかねばならん。かく貧のドン底に落ちきってこそ、大神様の御守護いよいよ〇霊験あらん」と説いてこれを実行せしめるのである。

(五)教会に対する搾取

(イ) 教費及び教育金

記述の教費の外に、さらに会計規定の定むる所より、毎年

大教会は 四十円

中教会は 三十円

分教会は 十五円

支教会は 八円

宣教所は 四円

を教庁に納付する義務が負担されている。実際は本部に徴収されるのである。

(ロ) 宣教所設置費

簡単な布教師がいくらかの信者を獲得して集談所を宣教所にしようと思えば、先ず本部より御分霊と称する鏡の下付を受ける。この際、上級教会及び本部に五十円以上を「礼物」の名によって献納しなければならない。

(ハ) 教会昇格費

運動資金 — 各教会が昇格せんとする場合には、上級教会、教務支庁、本部員に多額の運資金を要す。もちろんこれは一定していないが、相場は、

宣教所から支教会となるには 1千円

支教会から分教会となるには 五千円

分教会から中教会となるには 一—五万円

の程度である。特に最後の分教会から中教会になるには、中教会が直轄教会であるだけに、前二者の場合と段違いであり、それだけ運動資金も莫大なものである。往年、摂津池田分教会が中教会へ昇格の際は二十万円を要したと言われるから、その実情全く想像の外である。

幣帛料 = 教会規程第十九条に、教会を設置し又は教会の陞級を出願するものは応分の幣帛料をその願書に添え教庁に納付すべし とあって已に述べたる如く、信者の教費、教師の教費、教会の教費、教師の新任、陞級の際の幣帛料は金額の規定あるに拘らず、また教会の階級を信者の戸数によって区別しながら、この教会の陞級の場合に限り、会計規定から除外していること、その上特に「応分」としている如きは運動資金の莫大と関係して考察するを要するのである。それは教会の昇級は実勢力の消耗に関することである、特に一躍直轄教会となることは非常なる特権を掌握する事であるからである。要するに、ここにも天理教本部の部下教会に対する露骨なる搾取政策の現れを見るのである。

*** **

大体以上に於いて種々重複した所もあったが、天理教本部の企図せる陰険にして執拗、巧妙にして悪辣なる搾取政策がいかなる状態にあるかを具体的に明らかにして来た。然しここで注目すべきことは、

(ア) 下級教会の運動資金の如きは、上級教会長、その配下に隷属する教師及び本部員の生活費の一部に充当せられるということ。

(イ) 下級教会、下級教師に対する搾取は如何なる場合といえども直ちに一般信者に転嫁せられ、信者は組織的継続的な搾取の標的に供せられるということ。

(ウ) 隠して信者は耐えざる物質的脅威を受け、それが常に信仰上の威嚇を伴っていると言う事、そして「教祖雛形の道」を実行して家財を挙げて蕩尽し、遂に物質的能力がなくなるに至れば「ひのきしん」の美名のもとに、労働奉仕を強要せられて、骨の髄までしゃぶられ、最後血の一滴まで搾取しつくされているということ、これである。

第四 祭典の執行と搾取

(一) 儀式行事

何れの宗教に於いても儀式行事の執行されるときは書き入れ時である。天理教だけに於いて是をとがめるわけではない。天理教信者が教会又は教師に依頼して、誕生式、成年式、結婚式、家督相続式、霊祭及び墓祭、葬儀の祭典を営むことは(教会規程第三七条)なんら差し支えない。故えに今日は祭典と搾

取の関係を、天理教独自の然も組織的大規模なものについて考察したいと思う。そのために先般の教祖五十年祭（昭和十一年）と立教百年祭（昭和十二年）の両年祭を取り上げて見る。

（二） 両年祭の概観

天理教本部が、地場は「神命の伏せ込み場所」であり、従って「地場から打ち出す言葉は天の言葉」との神言に基き、本部の命令を神の命令と同様なりとし、極端なる本部の絶対命令権を確立して、その命令に絶対服従せしめるべく、日夜教徒を組織的に訓練し、教団を好く指導し統制しつつあり、しかもこれが実際に行はれていると言うことは実に脅威に値する。両年祭を数年後に迎えた天理教本部は、この機会に本部の面目を一新し、百年の大計を樹立すべく一大記念事業を計画発表した。即ち昭和五年九月、先ず両年祭執行の旨を宣し、同十月二十六日に、それに関する管長輸達が発せられ、同二十八日から三日間、一万余の全国各教会担任者を一堂に集めて、そのための講習会を開催し、超えて六年一月六日本部役員会議を経て、翌七月の直轄教会長会議に於いて左の事業内容を発表した。即ち、

教祖殿の新築

神殿（礼拝殿）の増築

神域の拡張

教祖墓地の改修

総合学園の建設

等これである。

しかしこの事業に伴う（必要でない、ではない、労働搾取があるから）膨大なる経費は、従来よりの搾取政策により已に固渇せる信徒のみの好く負担し得る所ではなく、ここに新に信者を獲得して、そこに財源を求めんとして、全日本人天理教化を目標とする運動方針が樹立された。少なくとも信者の増加運動であって、「日本人更生運動」なる名目のもとに非常なる意気込みを以って巻き起こされた。そして、右事業に要する経費は、各教会に相当数が割り当てられ、その責任額に達せざる時は教会長の責任として自己負担が強制された。その結果、昭和五年より昭和十一年までの間、天理教青年会、同婦人会、よのもと会を初め教信徒を総動員して全国各地に戸別訪問、路傍講演、文書伝道等あらゆる手段方法を尽くして猛烈なる信者獲得の挙に出て、かくして新たに獲得せられたる信者より、執拗に、既に述べた様な方法で以って莫大なる搾取をなし一面、旧来の信者に対しても手を緩めることなく、千載一遇とも言うべきこの両年祭に際会しながら、御教理、親神様に御奉公出来ざるがが如きは、御道の信者としてこれ以上の不幸はないと献金を勧説し、段さんを募集しては、「ひのきしん」の名の下に教団造営事業に労働奉仕を強要した。その結果遂に教祖殿、御用場、合殿は昭和八年十月に竣工し、同月二十四

日新教祖殿の遷座式、二十五日その落成奉告祭が執り行われた。神殿（及び礼拝殿）は昭和九年三月二十六日上棟式、同年十月二十四日遷座式、二十五日落成奉告祭を執行した。かくて教信徒は「地場の芯に据えられた雛形甘露台を中心として南北両礼拝殿より親神を拝する喜びに浸ることができるようになったのである。」また豊田山上にある教祖墓地の改修に成功し、併せて神域を拡大して豪壯を極める建築物の調和を図るなど計画の大部分を完了した。目下は、総合学園の完成に向かって進んでいる。然し現状においては、この最後の点には悲壯感が可なり濃厚の様である。最後にこの兩年祭に処した本部の政策を督見して本稿を終わりたいと思う。それは、兩年祭の意義を如何に考え、年祭活動が如何に進められたかであって、ここにも天理教独特の教義と本部の伝統的政策が顕れているからである。

（三） 兩年祭の意義

兩年祭が天理教の信仰乃至教義から言って如何なる意義を有するとしているか、先づこの所説に聞くこととする。

（①） 教祖五十年祭

天理教の教義に立脚すれば教祖とお地場と天理王命とは、密接不可分の関係にあり、信仰的には三者同一と見るべきであるとして曰く、

「年祭によって教祖様を偲び奉ると言うた事は直ちに天理王命を思いおぢばを慕うことになり、教祖様の御霊を慰めることは取りも直さず天理王命への報恩の道であると同時におぢばの理を發揚せしめる所以であります。・・・・故に教祖様の年際は単に祭典だけを執り行ってその御徳を偲ぶと言うようではなく、必ず年祭に伴うだけのつとめ＝・・・・おぢばの理の繁栄弘化を図るために全力を傾倒しているのです。」と天理教の神観、お地場、教祖の不可分権の詳論は別に機を得てまとめたいが、これによって見ても如何なる下心あってかく解釈しているかは想像に難くない。且つ「十年一節」としてその五十年の意義、「節から芽が出る」との同教信者の根強き信仰心を弥益々駆り立てているのである。

（②） 立教百年祭

これ教祖神懸かりの天保九年十月二十六日の天啓事実にその祭典意義の基調を有すると言う。即ち同教信仰の根幹たる泥海古記に従って、「天理教綱要」には、

「天の親神様は天保九年より起算する九億九万九千九百九十九年の昔大和のおぢばに於いて世界創造の大業に着手遊ばされたのでありますが・・・・それは形の完全に過ぎないのであります。・・・・此れに於いて親神様は元々因縁ある大和のおぢばに因縁のある教祖様によってこの中身たるべき精神世界

の創造を再び遊ばされる事になったのであります。」とし、これを後述する如き、人類更生運動と結びつけたのである。

(四) 両年祭への活動

(イ) 建築状況 (各)

(ロ) 日本人更生運動

これを簡単に言えば、この両年祭を一契機として全日本人を天理教によって更生せしめようとする信仰運動である、といえよう。そして、「両年祭の時期は正に人類の第一次更生の旬に当たっているのですが、更に（泥海古記）によりますと、先に大和の国へ生み下ろされた人間が大和民族となり、後に他国へ生み下ろされた人間が外国人の祖先となったと啓示されてありますから、これから言って全日本人は外国人に先んじて生まれ更わ利をすべき宿命の下にあるのであります。」まではよいとしてその具体的方法が、

「即ち日本の人々をおちばに連れ帰り、ここで「九度の席」を運ばして教祖様存命の理の籠る御教理を以って薰陶し、そして十回目に始めて「お授け」を頂くことによって日本人各自の心霊を更新せしめようとするのであります。これは元々人間が親神様の胎内で十ヶ月育てられて後誕生した人間御創造の時の事情（泥海古記のこと）と全く同じ理であり、かくて「お授け」を戴く人々の精神には大きな理の変化が起こり茲に各人の新しき生涯がこめられるにいたるのであります。」と言うに至っては、已に「受訓」に於いて明らかにした如く、普通の人間を去勢して天理教徒として搾取の対象物に供せんとするに外ならぬ

(③) 団参と「ひのきしん」

更生運動はまたおちばへの団参となって現れた。昭和六年三月二十五日に大阪地方の1万3千名からなる団体がトップを切り、翌四月には約四万人、十月には約五万人の団参を数へ、昭和七年には毎月殆ど同数の団参者を見、同年三月等は大阪府よりの五万人、兵庫県よりの二万人の如き一地方だけの団参も目立ち、以来おちば帰りの団参のために、特別列車が一地方から二十本、三十本と出る事は珍しくなく、昭和八年十月の教祖遷座祭、昭和九年十月の神殿落成奉告祭の執行された時等は、各々帰参者二十数万人を突破し、昭和十年の教祖五十年祭には参拝者万百人と呼ばれる。しかもこの団参は、単なる参拝者の糾合と言うだけでなく、その殆どが「お授け人」たるべき「別席」運びの人々であった。昭和八年十月の如きは、二十一日から三十一日に至る僅か十日間に別席を運んだ者、実に四万五千名と言う数字を示している。これら引続く団参の幾数とも知らぬ人波は、地場の詰所に宿泊して、みな「ひのきしん」に奉仕した。その労働力はおし測り知るべからざるものがある。

(4) 別科生の氾濫

天理教校別科生が常にその入学者一万二、三千人を上下し、第五十五期生（昭、九、九）の如きは約三万人に為らんとした。この別科卒業者を以って組織する「よのもと会」は会員八万、「助け一条」の第一線に立つこれら「御道の戦士」が昭和九年度に働きかけた「にほひかけ」とその実績は物凄いばかりであった。

(5) 教義講習会

本部はこの間にあつて特に教師を絶えずこの目的に向かつて訓練する事を忘れなかった。昭和五年十月、地場に於いて開催された第三回教義講習会には、教会担任者一万余人の教師が参集して、両年祭への活動方針を授けられ、昭和八年一月の本部での第四回教義講習会は更にこれに拍車をかけ、一方では全教線にわたって全国各地で開かれた「お授け人」の地方講習会、昭和十年一月の第五回のそれ等を経て、全日本人を「お授け人」たらしめようとの意気に燃え立たしめた。なほ、先般行われた第七回の教義講習会は、在来のそれと内容が余程変わってきている。これは教団がある種の薄気味さを感じた一つの現れだとも思われる。

(へ) 雑

この外に、昭和九年三月十五日、天理教、いちれつ会の財団法人認可、総合学園建設への運び、昭和九年の満州天理村への移民、管長の渡半等あるも省略する。

最後にこの両年祭活動の熾烈な時に、例の天理教脱税問題の起こった事を付記しておく。

*** *** ***

以上に於いて我々は先ず天理教を教義上の性格から明らかにしてそれが搾取を目標として打ち建てられ、少なくともその目的に向かつて運用されている事情を示し、これが如何にその制度や組織並びに教徒の訓練に於いて具体化しているかを検討した。そして最近の両年祭に於ける活動に就いても亦この事情を叙述した。これによって、天理教の搾取の、謂わば総論を試みた積りであるから、次の機会にその搾取の実例を示すであろう。